

エディトリアル

東京ベイ・浦安市川医療センター 副管理者 木下順二

2011年3月11日の東日本大震災から間もなく5年が経とうとしている。東日本の太平洋岸を襲った津波などのため、1万8,460人もの人々の命が奪われた。

埋立地の液状化で甚大な被害を受けた千葉県浦安市では、道路等の改修が進み震災の爪痕に気付かされることはほとんどなくなった。東京近郊では計画停電や、節電による地下鉄駅のエスカレータの停止などもすっかり過去の出来事となり、震災が日常の話題にのぼることは少なくなった。

しかしながら復興庁の発表によると、2012年3月時点で34万人あまりであった避難者数は¹⁾、2015年11月時点でも約18万7千人までしか減っておらず、避難先は全国47都道府県の1,145自治体に及んでいる²⁾とのことである。特に炉心溶融事故を起こした東京電力福島第一原子力発電所周辺では、12市町村が避難地域とされている。そのうち帰還困難区域では非常に高いレベルの放射線量のため避難指示解除の目処も立たず、原則的に立ち入ることができない状況が続いている³⁾(本特集記事「福島県 南相馬市から」図1 16頁)。多くの方々にとって震災は現在も継続する問題なのである。

公益社団法人地域医療振興協会では、2011年4月に町立病院を指定管理開始予定であった宮城県女川町を中心に組織的な支援活動を行った。2011年8月20～21日に開催した第5回へき地・地域医療学会「震災と地域医療」では被災地の現状や支援活動の報告などが行われ、その内容は本誌2011年10月号の特集記事として掲載されている。読者の中にも、震災後に被災地支援に赴いた方や、今も継続的に被災地で活動を続けている方も少なくないだろう。

私自身も2011年3月から7月にかけて延べ17日間女川町で活動した。その後すっかりご無沙汰になっていたが、2015年12月11日におよそ4年5ヵ月ぶりに女川町を訪れる機会を得た。家族を亡くされた方にとってはちょうど月命日にあたり、地元ラジオでは墓参の話題が流れていた。津波により壊滅的な被害を受け、震災後には瓦礫の原であった女川町の中心部は、盛土と造成工事によりまるでニュータウンの建設現場のように変貌しており、当時の様子を物語るのは横倒しのまま残されている旧女川交番の建物ぐらいであった。2015年3月に復旧したJR女川駅に併設された温泉施設では地元物産の販売も行われ、駅前商店街では12月23日のオープンに向けて準備が進められていた。夜に女川町地域医療センターの窓から駅の方を見ると、「海ほたる」と名付けられたイルミネーションが美しく輝き町の復興の象徴となっていた。

この日は大雨であったので、震災で地盤沈下した海岸沿いの低地では相変わらず道路の冠水があちこちで見られた。新たに造成した土地への住宅の建設はまだこれからで、長

期にわたり仮設住宅での生活を強いられている人も多い。日々の苦勞は、安穩とした生活を送ってきた自分にはうかがい知ることができないものがあるだろう。しかし、確実に復興への道を進んでいく町の姿に、人間の力の強さを感じることができた。

震災から5年というひとつの節目を迎えることから、今回の特集では東北沿岸部各地で活動している6名の医師に現状報告をいただいた。

「福島県 南相馬市から」では、福島第一原子力発電所から23kmに位置する同市周辺での産科医療の状況などについて、南相馬市立総合病院 安部 宏産婦人科科長よりご報告いただいた。原発事故の及ぼした影響がいかに甚大であるか、改めて思い知らされた。

「福島県 いわき市から」では、被災したクリニックを再建し再びコミュニティの医療に取り組んでいる光洋台クリニック 上野 博院長より、被災時の状況や同市の医療・介護の現状についてご報告いただいた。

「宮城県 女川町から」では、復興が進む女川町が抱える医療・介護・生活上の課題や女川町地域医療センターの活動について齋藤 充センター長よりご報告いただいた。なお齋藤氏は2015年11月に社会貢献者表彰を受けている。

「宮城県 南三陸町から」では、プレハブでスタートした公立南三陸診療所、町外に間借りした公立志津川病院米山病棟での医療、2015年12月に新築再建された南三陸病院の今後の展望について、南三陸病院 西澤匡史副院長よりご報告いただいた。

「宮城県 気仙沼市『ふるふるサポート気仙沼』」では、震災以来多面的継続的に同地区で支援活動に取り組んでいる山梨市立牧丘病院 古屋 聡院長より、口腔ケア・摂食嚥下・コミュニケーションサポート活動、復興住宅の抱える新たな問題などにつきご報告いただいた。

「岩手県 沿岸部から」では、震災当時の医療連携や被災地に位置する各県立病院の現状について、岩手県立中央病院 遠藤秀彦院長よりご報告いただいた。

未曾有の大災害を改めて振り返り、被災地の復興に思いを巡らせるきっかけとなれば幸いである。そして未来に訪れるかもしれない災害に備えることも怠たらぬように心がけたい。

- 1) 避難者数の推移 復興庁ホームページ http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20150929_hinansha_suii.pdf
- 2) 全国の避難者等の数 平成27年11月27日 復興庁ホームページ http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20151127_hinansha.pdf
- 3) 避難指示区域の状況 ふくしま復興ステーション <http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/list271-840.html>